

地域の情報

発達障害通級指導教室修了生への聞き取り (2) —本人との語りと対話によるライフラインの分析—

吉 橋 哲*

通級指導の充実、自己理解や自己決定の指導につながる知見を得ることを目的に、発達障害通級指導教室を修了し、現在は知的障害特別支援学校高等部に在籍する生徒3名を対象に面接を実施した。これまでの歩みを振り返るとともに、ライフラインの手法を用いて幸福感・満足感を描いたところ、それぞれが過去の出来事等を客観的に捉え、将来への夢と希望を抱いて歩み始めている姿を確認することができた。いずれも、中学校卒業後の進路を自己決定したこと、高等部での学びを通して自己理解を深め、将来の目標を具体的に描いていること、友達や先輩の存在が支えになっていることが共通して認められた。今後の通級指導や特別支援教育の充実につながる情報や知見を得ることができた。

キー・ワード：通級指導, ライフライン, 自己理解

I はじめに

平成29年4月28日に告示された新たな特別支援学校学習指導要領（小学部・中学部）の自立活動の内容では、「健康の保持」の区分において「障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること」が新たに規定された。ここには、「自己の理解を深め、自己肯定感を高めるとともに、得意不得意等に係る意思を表明する力を育み、主体的に学ぶ意欲を一層伸長するなど、発達の段階を踏まえた自立活動の内容を改善・充実することが必要である」とする中央教育審議会教育課程部会の検討が反映されている。この点について田中（2017）は、背景には障害者差別解消法において、障害者側から意思表示があった場合に合理的配慮が提供されるという基本方針があること、意思を表明する前提として適正な自己理解が必要であり、自らの特性を理解することとその気付きが、さらなる生活の工夫と改善に結びつくことを指摘している。

著者は、平成17年度から19年度までの3年間、新潟県長岡市立千手小学校において、市内で初めて開設された発達障害通級指導教室（以下、通級指導）を担当した。前著では、通級指導の修了生（以下、修了生）3名への面接を実施し、一人一人の歩みや未来への展望等を聴取するとともに、その成長の過程を明らかにした。様々な体験や学びを通して形成された自己理解の深まりが自己肯定感を育み、将来の目標や夢を描く力につながっていることを強く感じた。

本調査では現在、知的障害特別支援学校高等部（以下、高等部）に在籍する修了生を対象に面接を実施する。いずれも、通常の学級から特別支援学級への転籍、特別支援学校への進学を経て現在に至っている。前著と同様、一人一人の歩み、教育環境の変化に伴う心情等を聴取し、その成長の過程を明らかにする。

II 目的

修了生への面接を通して、自らの歩み、目標達成のプロセス、これからの夢や希望等の情報を収集し、通級指導の充実、自己理解や自己決定の指導につながる知見を得る。

III 方法

1 対象

個別の面接について、現在高等部に在籍し、本人及び保護者の了解を得た修了生3名を対象とした。面接時におけるプロフィールは表1の通りであった。小学校では、いずれも他者へのかかわりやコミュニケーション、行動上または学習上の課題があり、その改善に向けて通級指導を実施した児童であった。

表1 対象者のプロフィール

	Aさん	Bさん	Cさん
面接時期※1	201X年5月	201X年6月	201X年6月
面接時の学年(性別)	高等部3年(女)	高等部3年(男)	高等部2年(男)
通級指導期間※2	約1年	約2年	約1年

※1 201X年度現在

※2 指導期間は筆者が担当した期間

2 手続き

対象の修了生に個別面接を実施した。記録には、主観的な幸福感・満足感の高低を座標の縦軸に、時間の流れ「年齢」を横軸に設定したシートを用いた。幼児期から今までの歩みを振り返り、幸福感の変化について、修了生自らが、または著者が聞き取りながらシートへグラフを書き記すようにした。想起し書き進めながら、自己決定の過程、新たな気付き等を確認していった。グラフが変化する点に着目し、その時の記憶やエピソード、感情の動き等について対話を通して聞き取り、グラフ上に著者が加筆、または別に文章化して記した。面接時間はそれぞれ約120分程度であった。

面接時に修了生が自由に描いたグラフを、後日著者が加工、

* 新潟県魚沼市教育委員会学校教育課

修正を行い、修了生からはデータの確認を得た。また記憶が曖昧な箇所については、保護者の確認を求めた。

河村（2000）は、ライフラインは自分の感情を中心として比較的容易に書ける自分史であり、自らの生き方を模索する上で最適の課題であると述べている。本調査でもこの主旨を生かし、ライフラインの手法を参考にした。

Ⅳ 結果

1 Aさんのライフラインから（図1）

（1）ライフラインの概要

幼少期からの記憶を鮮明に語った。幼稚園年少時の記憶から現在まで、ラインは大きなうねりを繰り返していた。心情の揺れが詳細に描かれる結果となった。

年少時は、園の活動にうまく乗れなかったこと、大人とのかかわりが困難であったこと等、具体的なエピソードが語られた。他者への不適切な言動も、その過程で学習したことが推察できる。

小学校入学後もラインは大きく変動している。Aさんにとっては、クラスや担任等、環境の変化が心情に大きく影響を与えていた。低学年で医療機関を受診しているが、この時期での明確な障害理解はなかったようである。小学校2年時から通級指導を開始した。6年時には特別支援学級へ転籍し、安定して生活できるようになった。また、友達とのかかわりを通して、相手の良さも感じられるようになった。

中学校では引き続き特別支援学級に在籍した。一転してラインはマイナス方向へ下降した。学習上の困難、指導者との軋轢もあり、全てがうまくいかなかったようである。この時期には、自らの障害の気付きと理解が生まれている。

進路では、高等部を選択し入学した。高等部ではラインの変動はあるものの、上昇カーブを描いている。作業学習の体験、教育課程のコース選択を経て、将来の夢とそれを実現するための目標も語られた。

（2）対話を通して語られたこと

①学習について

教科の勉強だけでなく、社会や人生の勉強があると良いと思う。中学校では、テストを受けたくなかった。でも振り返って考えると、テストはしっかり受けた方が良いと思っている。進路が結果的に高等部だとしても、選択肢が広がったかもしれない。

②自己理解について

自分の強みは、分からない時に人に聞けること、相手の相談に乗って一緒に考えること、対話ができて自分の意見が言えることだと思う。

弱みは、集団や小さい子、整理整頓、たくさんの人と仲良くすることは苦手である。

③大切なこと

自分には、まだできていないことが多すぎると思っている。目標をもつことが大事なので、小さなことでも目標の実現に向けてやり続けたい。相談しあえる友達の存在が大きい。

2 Bさんのライフラインから（図2）

（1）ライフラインの概要

保育園年長時から小学校低学年まではマイナスだったラインは、中学年からは変動しながらもプラスへ移行し、現在もその傾向は持続している。

小学校2年から通級指導を開始し、4年からは特別支援学級へ転籍した。その時期よりラインが大きく上昇していることから、Bさんにとっては適切な環境であったことが伺える。中学校では、引き続き特別支援学級へ在籍した。入学直後は不安があったものの、その後のラインは安定していた。

進路では、高等部を選択し入学した。友達とのかかわり、作業学習や実習を通して、失敗を体験しながらも自信を深めていく過程が描かれた。接客業へ就くために、自己理解を踏まえた目標を設定し、その実現に向けてラインの終末は上昇している。

（2）対話を通して語られたこと

①自己理解について

スーパーに買い物に行き、そこで働く人を見て接客業をやりたい気持ちになった。まだ自分には満足していないし、できることがあると思う。自分から挨拶し、話もできるようになって、コミュニケーションが少しずつ得意になってきた。手先は不器用だが、苦手なことにもチャレンジしていきたい。

②大切なこと

特別支援学校で友達が増えた。友達とはよく遊び、話をする。進路のことなど、悩みを話すこともある。友達の存在はとても大切である。

3 Cさんのライフラインから（図3）

（1）ライフラインの概要

幼児期を経て小学校から中学校まで、ラインはマイナス域に留まっていた。その後、高等部入学を期に上昇カーブを描いている。

小学校1年から通級指導を開始、その後特別支援学級へ転籍した。教育環境の変化に伴う明確な心情については、その語りを導くことができなかった。また中学校でも、Cさんの心情を揺さぶるエピソード等は確認できなかった。

しかし高等部入学後は、一転してラインは上昇カーブを描いた。友達とのかかわり、作業学習の体験を通して適正に自己理解を図り、上学年としての自覚、自らの目標を意識する過程が表現された。

（2）対話を通して語られたこと

①自己理解について

作業の活動を通して、事務や印刷する仕事に慣れて、得意になってきた。コミュニケーションでも、知らない人ともかかわれるようになってきた。「休ませてください」「気分が悪いです」ということも伝えられるようになってきた。声が大きいところは、自分の良さだと思う。走ることは苦手である。

②大切なこと

高等部では、嫌なことをしない先輩ばかりである。ランニングやサッカーなど、サークル活動を一緒にやっている、穏やかな雰囲気話することができる。3年生になったら1・2年生を引っ張って、自分も先輩らしさを出したい。

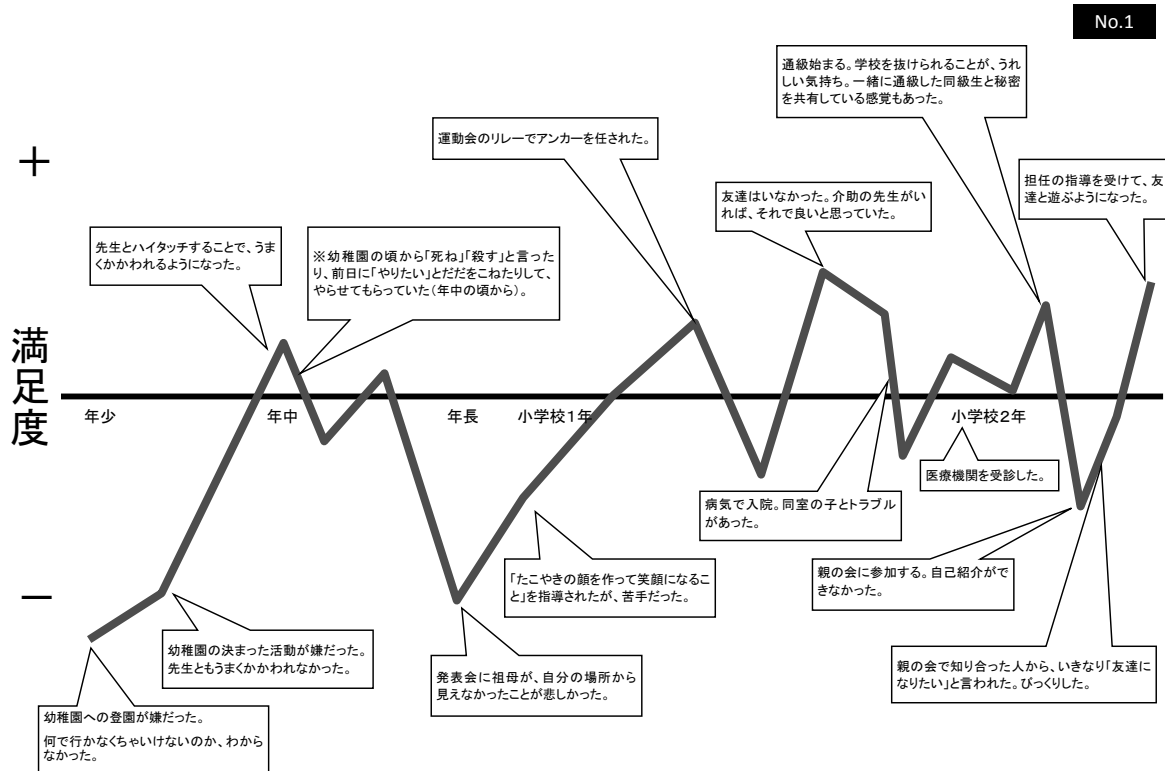


図1-1 Aさんのライフライン1(年少～小学校2年)

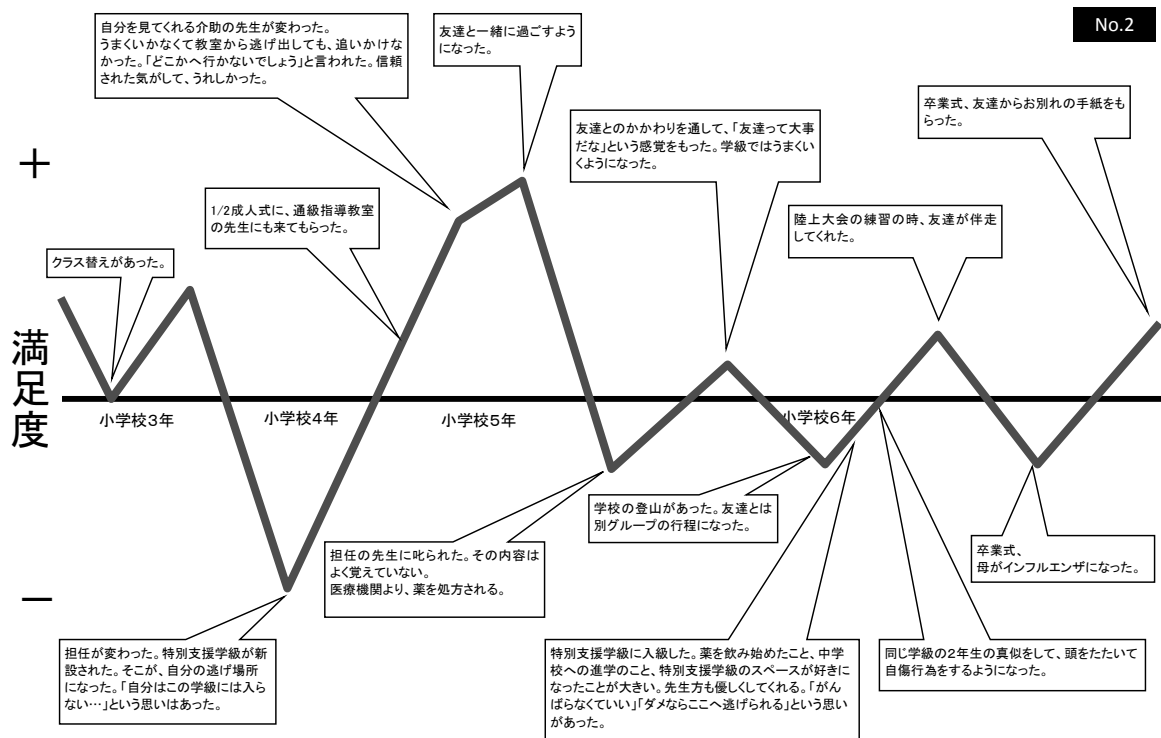


図1-2 Aさんのライフライン2(小学校2年～6年)

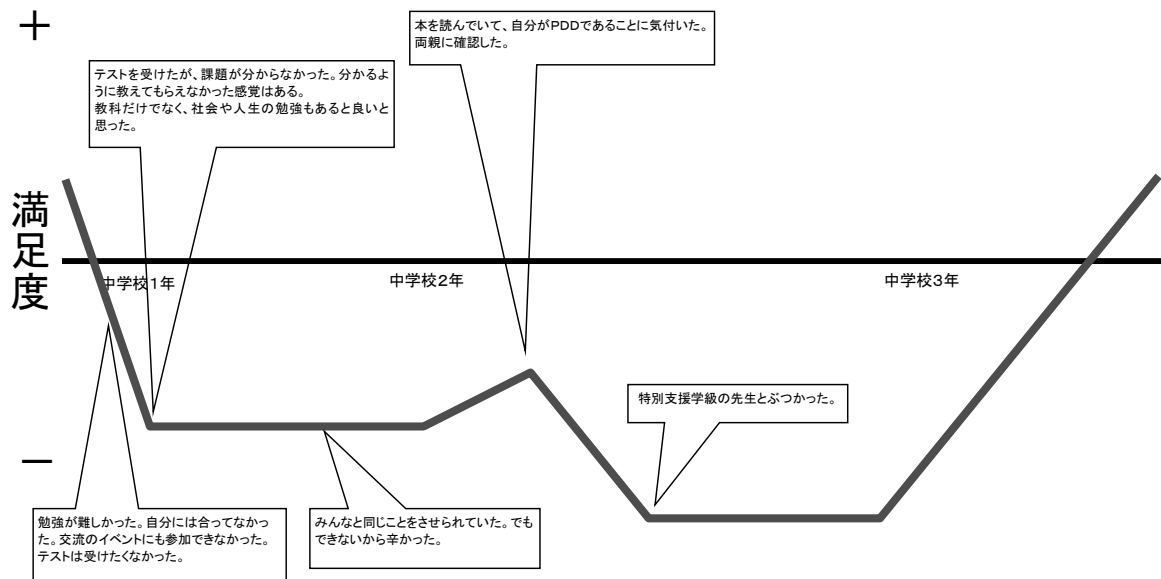


図1-3 Aさんのライフライン3（中学校1年～3年）

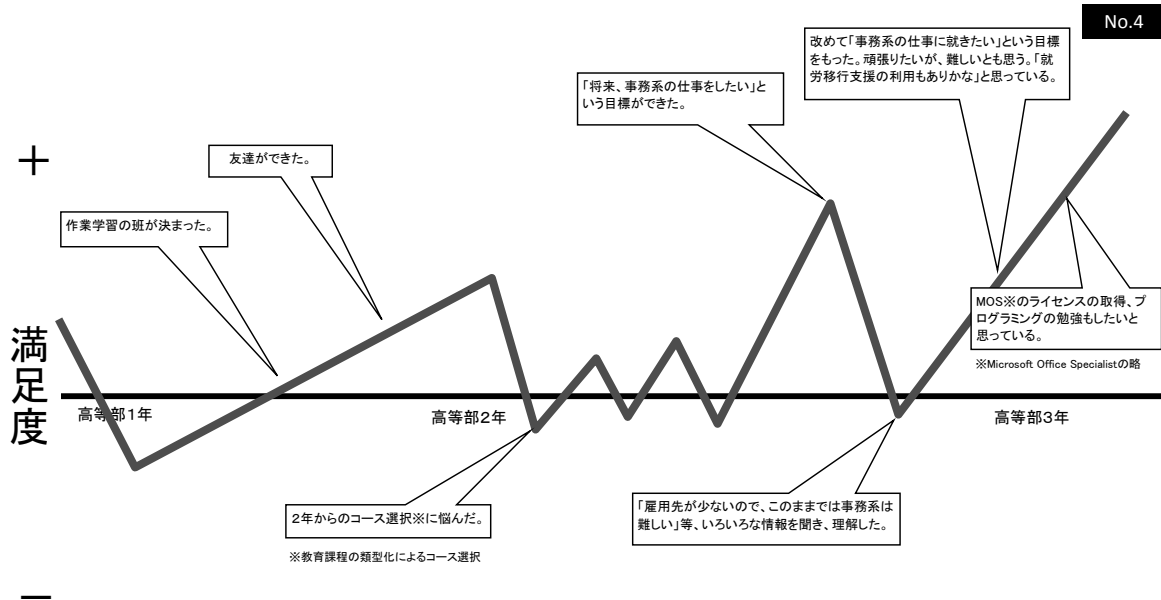


図1-4 Aさんのライフライン4（高等部1年～3年）

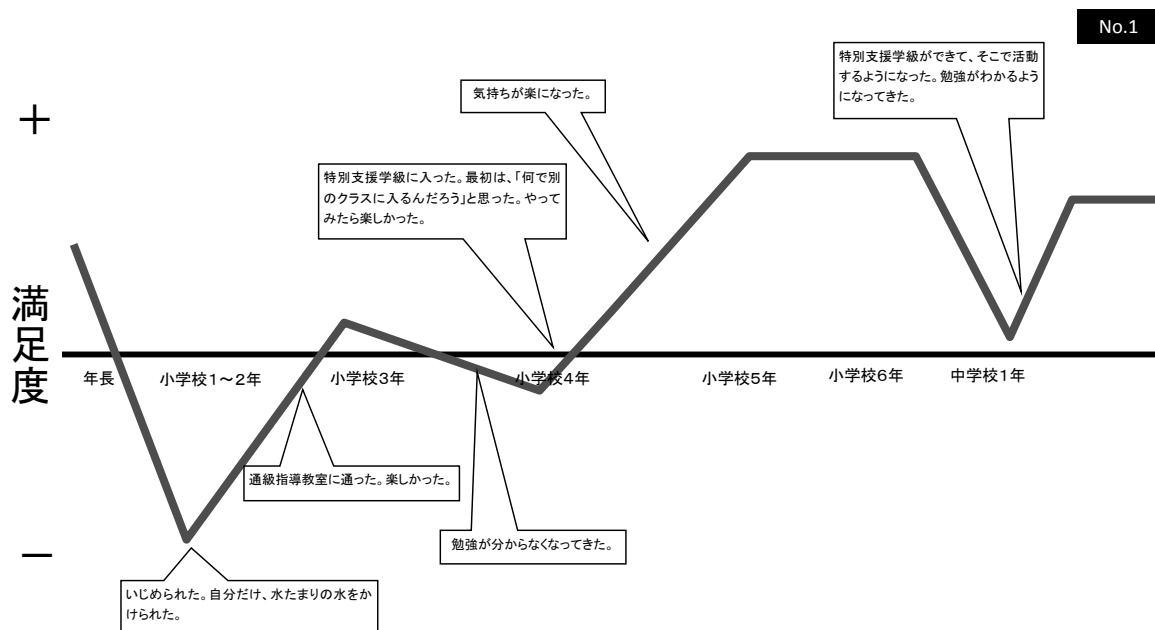


図2-1 Bさんのライフライン1 (年長～中学校1年)

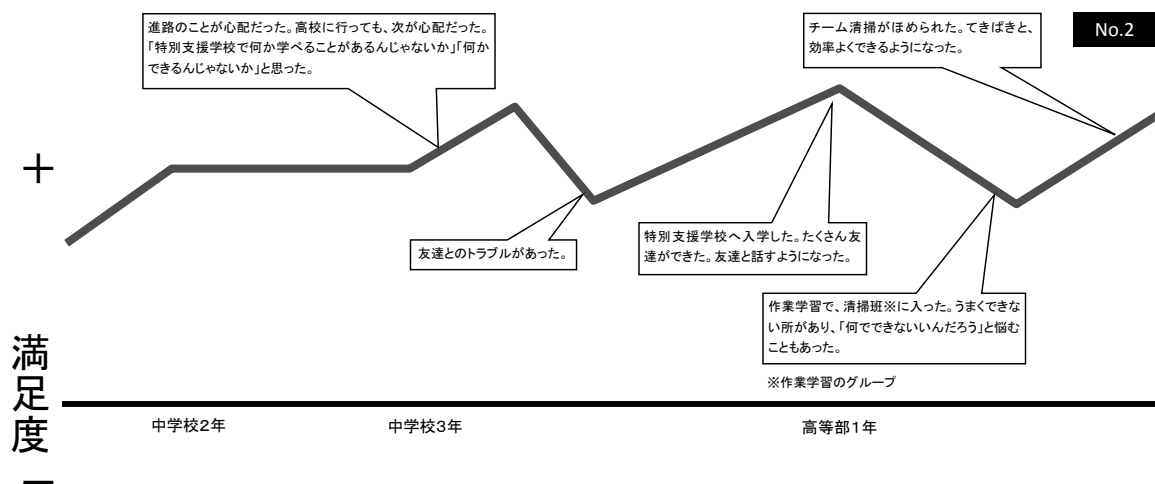


図2-2 Bさんのライフライン2 (中学校2年～高等部1年)

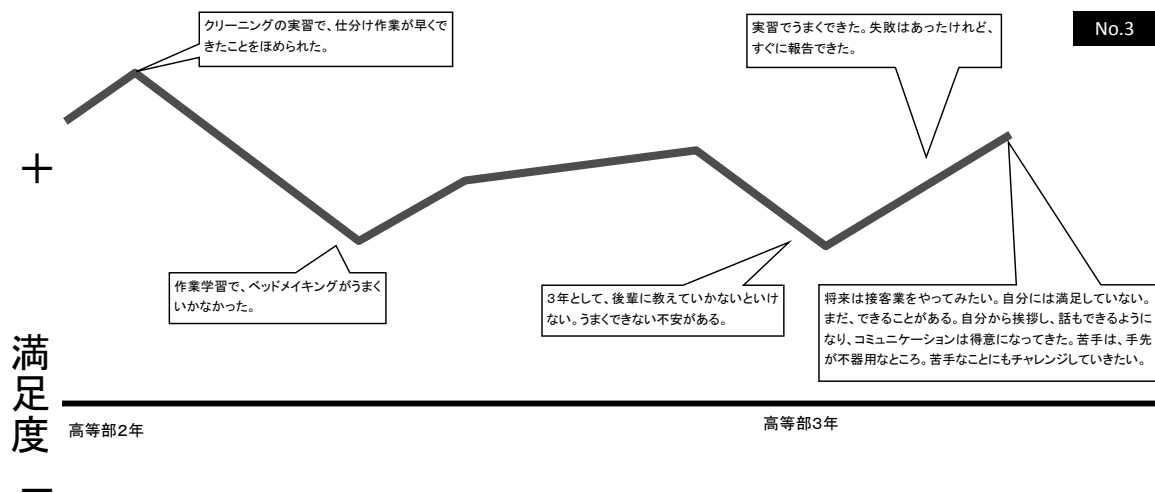


図2-3 Bさんのライフライン3 (高等部2年～3年)

+

満足度

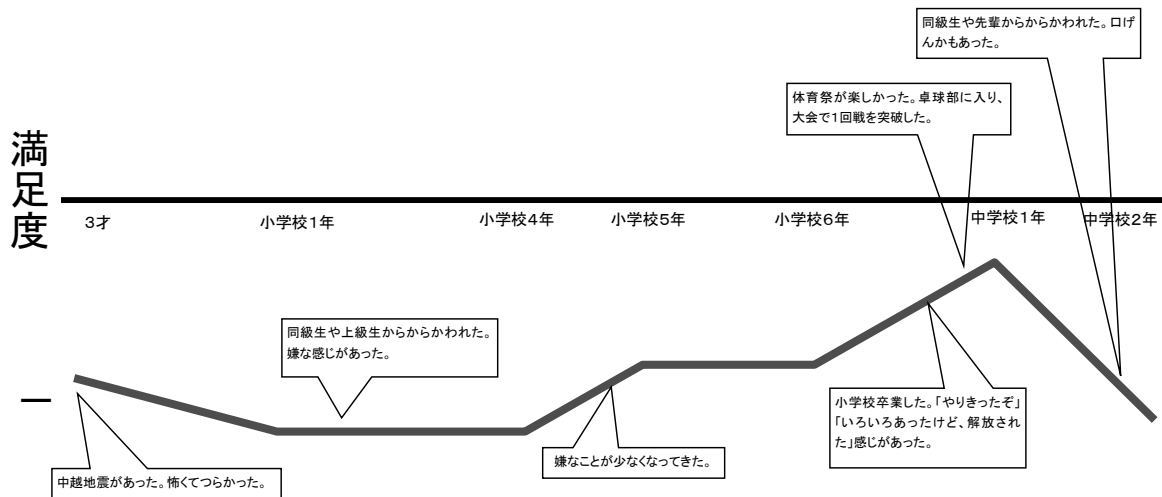


図3-1 Cさんのライフライン1（3才～中学校2年）

+

満足度

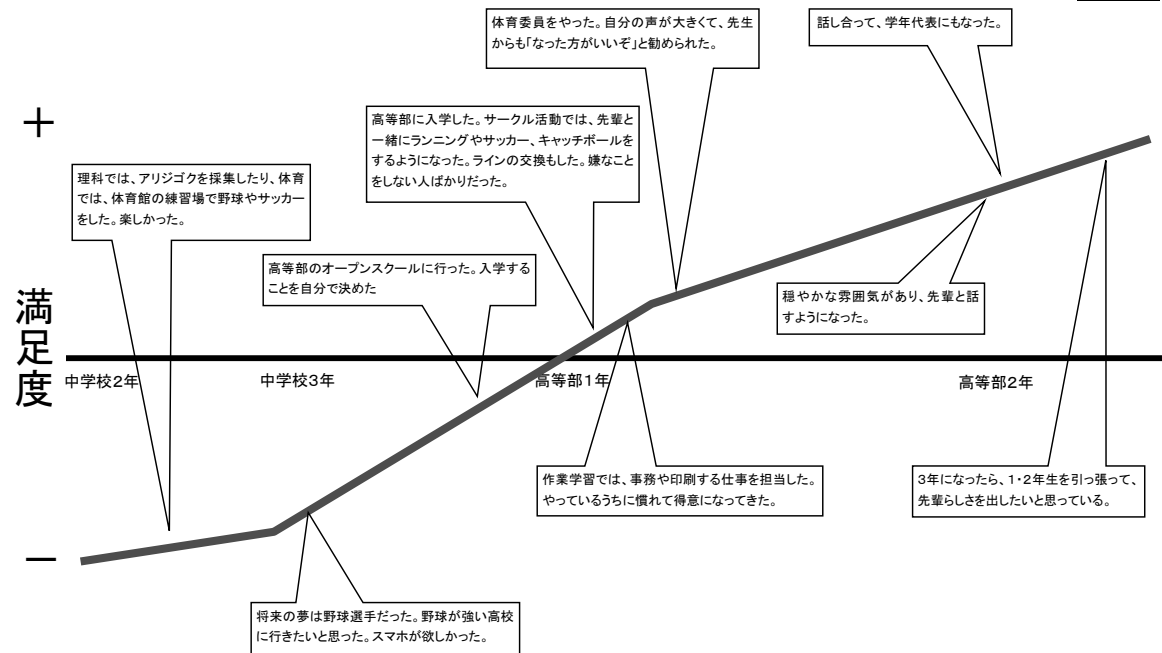


図3-2 Cさんのライフライン2（中学校2年～高等部2年）

V 考察

面接した3名とも、幼少期の辛い体験を乗り越え、様々な活動や体験を通して、現在では積極的で前向きな姿勢でいることが伺えた。通常の学級、通級指導、特別支援学級から高等部へと、自分に合った教育環境の中で自信を深め、自己肯定感を高めていく過程を見ることができた。

Aさんは、中学校生活を振り返り、「テストをしっかり受けることで、新たな自分の可能性を見出すことができたかもしれない」と語った。学びへの強い意欲を感じることができた。現在、事務系への就労に向けて努力を続けている。学びへの意欲は絶えることなく、プログラミングの学習やライセンスの取得を目指そうとする気持ちへとつながっていることが分かる。

Bさんは小学校から中学校へ、特別支援学級での生活を通して自信を深めていった。将来を見通し、自らの成長と新たな学びを期待して高等部へ入学した。「接客業をやってみたい」という明確な目標をもち、自分の力を高めている。苦手な部分を克服し、チャレンジしようとする意欲が伝わる語りであった。

Cさんは、中学校卒業から高等部入学にかけて、ラインを大きく上昇させた。活躍の場を広げることで、自分の良さを実感できるようになった。将来の具体的な目標はまだ明確ではないが、上学年としての自覚がもてるようになった。力強く自信に満ちた語りであった。

3名の語りからは、3つの共通点を捉えることができる。

1点目は「自己決定」である。Aさんの「社会や人生を学びたい」という願い、Bさんの「特別支援学校で何かできるのではないか」という気付き、Cさんのオープンスクールでの体験は、進路先を自己決定する力になった。

2点目は「自己理解」である。高等部における様々な活動を通して、自分の強みや良さを実感するとともに、弱さや課題も受け入れられるようになった。このことは、それぞれの明確な目標設定にもつながっていると考えられる。

3点目は「友達や先輩の存在」である。Aさんは、友達とのかわりが、ラインの上昇に大きな影響を与えていた。Bさんは、「友達の存在はとても大きい」と語った。悩みを共有することで、その存在の大きさに気付くようになった。Cさんは、先輩の姿をモデルに「自分も先輩らしさを出したい」と語り、目標を描けるようになった。

これら3つの共通点は、いずれも今後の特別支援教育の充実に向けて大事な視点だと考えられる。教育活動全体を通して、育んでいく必要がある。

森脇(2011)は、「本人の夢や願いをどのような形で実現していくかは、結局は自己理解の在り方にかかっています(中略)。過去と将来の『在りたい自分』の間を行き来することで、現在の自分の姿があることに気付いていきます。今の自分を肯定的に受け入れていくことが、夢や願いを育てる環境であると考えています」と述べている。3名とも、適正に自己理解を深めながら、今の自分を肯定的に捉え、夢や願いの実現に向けて確かな一歩を踏み出し始めている。教育活動全体を通して、自己評価や他者評価、相互評価等、多様な評価を工夫しながら自己理解や自己決定を図ることが大切であると考えられる。その中で、良さや強みを引き出しながら、自信や自己肯定感、自己有用感を育む取組を教育活動の基盤と捉えたい。一方、友人

関係の形成や仲間とのかかわりは、青年期発達の特徴である。個々の特性を踏まえつつ、仲間作りを進めていくことも、成長につながるものと考えられる。

遠くない将来、職業に就き社会的な自立を果たす青年である。新たなステージに立った彼らから、社会人としての歩みを聴取し、特別支援教育を推進する知見を得たい。

文献

河村茂雄(2000)心のライフライン, 誠心書房.

森脇勤(2011)学校のカタチ「デュアルシステムとキャリア教育, ジアース教育新社, 72.

文部科学省(2016)中央教育審議会教育課程部会資料.

文部科学省(2017)特別支援学校小学部・中学部学習指導要領.

田中裕一(2017)特別支援教育士資格更新必修研修会「特別支援教育の最新の動向」から.

吉橋哲(2016)発達障害通級指導教室修了生への聞き取り-本人の語りと対話によるライフラインの分析-, 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要23巻.